

らい 来ぶらり 25

本というのは、いろいろな夢を秘めている魔法の容器である。物が豊富に出回っている現在でも、面白そうな本を見つけたときの、あのわくわくするような未知への期待感是不変。

私は4人兄弟の末っ子なので、小学校時代は何でもお下がりが多かった。その中でも全81巻に及ぶ『児童文庫』は、科学、歴史、社会、芸術、古典、読物など、今の私の好奇心と教養らしきものすべての根源になっている。

また兄は使い古しの漢和字典と、アルファベットやローマ字表が印刷された下敷をくれた。まず漢字の数の多いことにびっくりしたが、漢字が偏と旁などから成り、50音が子音と母音との組み合わせであることを自分で発見したときの驚異は、非常に新鮮だった。

星に興味をもった私に、姉は学校の図書館から『図説天文学講座』全6巻を1冊ずつ借りてきてくれた。内容は難しかったが、当時の本は漢字にルビがふってあるので、何とか読むことができ、また自然に漢字もおぼえられた。4次元宇宙など小学生には到底理解できなくても、難解さがかえって宇宙へのあこがれを駆り立てる。そのころ、古本市で見つけたエディントンの『膨脹する宇宙』は、今でも冒頭の文章を思い出すくらい私を熱中させた。

しかし当時の私には本を自由に買うだけの金はもらえなかったから、本屋はいつも宝島のように見えた。期待して行った大きな市立図書館で、小学生

本は夢の玉手箱

※
図書館長 高本 進
(理学部教授・無機化学)

は一般閲覧室には入れてくれず、子供だましの本しか見られなかった。

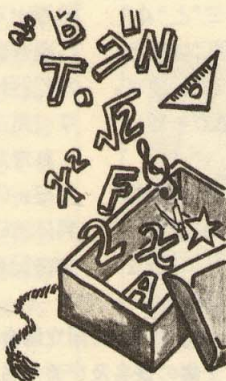
中学に入ると、兄は兵隊にとられてその戯書を預かることになった。哲学書が多くて私には歯が立たなかったが、ポアンカレの3部作は私の科学観を根本的に変えた。仲間と同人雑誌を作ろうとして生徒課に見つかり、アカとみなされて絞られる時代でもあった。

やがて戦争が激化し、学校の代わりに工場で肉体労働させられることになる。数学の先生が、もう君たちには勉強する機会など一生来ないだろうからと、週に一夜自宅に有志を集めて、特別授業をしてくださった。空襲になっても「学問しながら死ねたら本望じゃないか」と続行。電車が不通になり、夜中に歩いて帰宅したこともあった。

ついに私の家も爆撃に遭い、猛火の中を逃げまどった。焼け出されて一時御回介になった家でも、いろんな本をお借りした。本土決戦が迫り、余命いくばくもないと覚悟しながら、廃虚の中で夢のように美しいヘッセやシュトルムの世界に浸った。讚美歌の「み神の賜へる浄き平和よ」の一節が不思議にいつも耳の奥でリフレインしていた。

現代は平和と繁栄の時代。本は無数に出版されるが、消えるのも早い。図書館の本は消えないから、掘り出し物をじっくり探したいと思っている。

※本年4月1日から、大学図書館長に就任。



入門 大学図書館

大学図書館には、大きく分けて閲覧室・参考室・閉架書庫・開架図書室の4つの場所がある。大学図書館を使い慣れていないと、どこが何やらわからないかもしれない。

閲覧室は、図書館の資料を館内で利用するための部屋で、大学図書館では1階と3階にある。参考室は各種の参考図書（辞書・百科事典等）を備え、利用者自身が調べものをしたり、係員（参考係）へ問い合わせをしたりする部屋で、2階にある。閉架書庫は、大学図書館が所蔵する図書の大半（約23万冊）を6層に分けて収めている所である。学部学生は中に入ることができないため、図書の請求は2階カウンターに申し込む。

そして開架図書室は、玄関を入りすぐ右側にある。ここでは、約400種の雑誌と28,000冊の図書が皆さんの利用を待っている。閉架書庫と違うところ

は、利用者自身が直接手にとって資料を選べることである。入室時に手荷物をロッカーに入れて、図書館利用証か学生証を提出することを除けば、ちょうど公共図書館のイメージで利用できる場所だ。

開架図書室に入って右側には、ブルーバックス、岩波新書、中公新書、クセジユ文庫、そして日経新書等のある「新書コーナー」がある。その隣は、アジア・アフリカ地域に関する図書（政治、経済等のジャンルにかかわらず）がある「アジア・アフリカ コーナー」となる。それに並んで、一般教育を担当する先生方が選定した図書を置く「指定図書コーナー」がある。一方、この部屋の左側は雑誌書架でかまれている。その手前の方に「ベストセラーズ コーナー」がある。ここの図書がいちばん利用が多い。皆さんも、まず開架図書室から使ってみよう。（運用係 入村和彦）

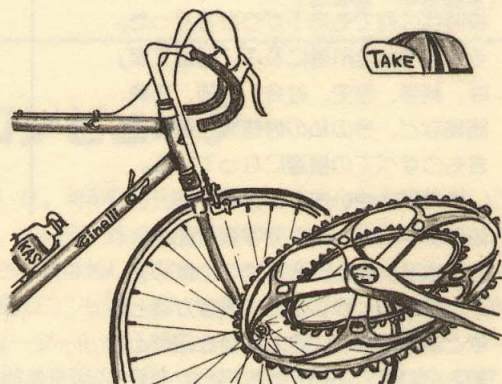
誌あらかると

たかが巻号、されど巻号

利用者：『法学セミナー』（以下『法セミ』）4月号が見たい。開架図書室へ行く。雑誌係：『法セミ』4月号を書店より受領。さっそくカードチェック。「34(4)(412)」ほか記入。開架図書室へ渡す。この34(4)(412)が『法セミ』4月号を示す番号、つまり第34巻第4号通巻412号ということです。

雑誌は巻号でとらえる—これが図書館の原則です。そこでもう一度『法セミ』4月号の表紙を見てみましょう。まず目につくのが、「法セミ」と「4」、「4」の下には小さく「vol.34no.4」、左側にはさらに小さな字で「通巻412号」と印刷されています。（ついでながら、1985年10月号から表紙が一変したことに気づきませんか？）

巻号表示の扱いは、紀要類は別としておおむねこんなものです。しかし一見地味な存在ながら、欠号の早期発見の強い味方なのです。仮に『法セ



ミ』5月号がvol.34no.6だとしたら、no.4の4月号との間にno.5にあたる臨時増刊号が出ていることに気づきます。また、通号表示は巻の変わり目で役立ちます。巻号表示だけでは、今年の12月号がvol.34no.12、翌年1月号がvol.35no.1になっていると、12月にno.13にあたる臨時増刊号が出ていても、気がつきにくいものです。しかし通号表示があれば、12月号が420号、翌年1月号が422号だとしたら、421号の臨時増刊号の存在にすぐ気づくというわけです。

たかが巻号、されど巻号—なのです。加えて『法セミ』の巻数表示には、後日談までついています。具体的には、第30巻第1号（1985年1月号）の編集後記をごらんください。（雑誌係 中野里美）

『国立国会図書館蔵書目録 昭和52—60年』が完結。国立国会図書館に納本された428,784件の和図書を収録。教育・文学等の主題別に編集され、全編の書名及び著者名索引がある。全29冊。参考室備え付け。

○ 研究室所蔵の図書を簡単に利用できたら… ○

私が図書館に望むことは各研究室に所蔵されている図書を図書館を通じてもっと簡単に利用できないかということです。私の経験上、図書館の目録カードを引いて、左肩に、例えば“英文”なんて書いてあるともう英文科研究室まで行くのが煩わしく、「面倒だからまあいいや」とそれっきりになってしまうことがあります。今の制度だと他学科の学生は各研究室で煩雑な手続きをとらねばならず、その方法も研究室によってまちまちです。それならば、たとえ借りるまでに多少時間がかかっても、他学科の学生は図書館で手続きができればいいと思うのです。こんな横着なことを考えるのは私だけでしょうか。とりあえず図書館まで足を運んでも、目当ての本に出合えない学生が結構いるのではないのでしょうか。(法3 阿部亮一)

▶ 利用者の声 ◀

○ いま、人気の若手作家の作品を読む ○

お茶を飲みに行くにはちよつと短いという中途半端な空き時間をもてあますことが、学生生活の中では少なからずあると思えますが、そんな時の時間つぶしにも私は図書館を利用しています。そういう時は1階の開架図書室の「ベストセラーズコーナー」に、新刊書が入ったかどうか見に行きます。山田詠美の『ベッドタイムアイズ』も村上春樹の『ダンス・ダンス・ダンス』も、私はここで借りて読みました。このような若い作家の新刊書をそろえている公共図書館が少ないので、読みたい新刊書を全部買う余裕のない貧乏な院生の私には、この企画はとても助かっています。さらに欲を言えば、大学生に人気のある「若手作家コーナー」を作って、両村上氏や高橋源一郎、島田雅彦等の全作品をそろえていただけたらと思います。

(国文学専攻 博士前 妹尾理江)

書物の風景 ——— 24

全集もので当初予定されていた巻号がなんらかの理由で大幅に変更されることが時々あります。仕事から多くの全集をながめてきましたが、不可解な謎を秘めた全集として『スターリン全集』をあげることができます。

『スターリン全集』はソ連共産党中央委員会付属マルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所から全16巻の予定で1946年から刊行されはじめました。しかし、第1刷りををはじめスターリンの死(1953年)の翌年からはじまった第4刷りまですべて第13巻で中断されています。当館所蔵の邦訳『スターリン全集』(大月書店 1952-53年刊)でも第1巻に全16巻と明示していますが、第13巻で中断しています。月報の12には、第14巻以後の続刊状況について「次回配本までには具体的に事情をお知らせしたい」と書いてあるので

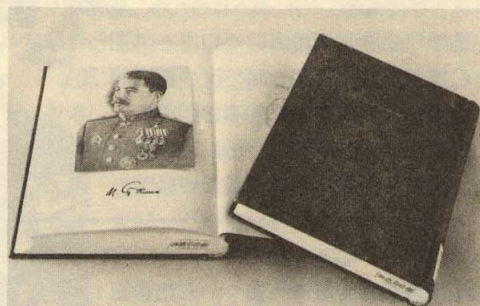
スターリン全集

刊行中断の謎

ですが、月報の13で「ソ同盟においても未刊であるので本巻13巻をもって一応終刊とする」とだけ書いてあり具体的な事情についてはふれられていません。未刊の部分については、マクニール版『スターリン著作集 全3巻』としてスタンフォード大学が引き継いで刊行しています。

ところが、未刊のはずの第16巻を慶応義塾大学付属図書館が近年入手しました。第1-13巻とまったく同じこげ茶色の装丁、大きさも同じこの本がアメリカの古書店にあったそうです。「幻の第16巻」がなぜあるのか? 第13巻で中断されたのはなぜか? この書物の背後にある謎解きの楽しさをあなたにもおわけしましょう。

(洋書係 中村清子)



参考室あれこれ

参考室には、辞書、百科事典、便覧、図鑑、年表、地図、人名・地名事典、文献目録、索引など、1万冊の参考図書が置いてあります。また、みなさんが研究・調査を進めていく上で必要な資料・情報を得られるよう個別に相談に応じています。

「がんの発生要因についての資料はないでしょうか？人口密度の高い地域の発生率が高いというデータがあるらしいのですが」

「地震に関する論文はありませんか？発生的なメカニクは別にして、一般的なものでのよいのですが」

「米の自由化に関するレポートを書くので資料を探しています」

「1974年代のテレビ番組を知りたい。超能力、

スプーン曲げがはやった時代です」

みなさんいろいろな問題をかかえて参考室にやって来ます。どうぞ気軽に声をかけて下さい。みなさんに参考図書を上手に使っていただくとともに、係員もそれらを使って文献・情報を探すお手伝いをします。けれども、複数の資料の中から「どれを選択するか」を決めるのも、問題に対する解答を見つけ出すのも、それはあなた自身であることを忘れないで下さい。

参考室は自由に利用できますので、年々利用率も高くなりうれしいのですが、『哲学辞典』『経済学辞典』『言語学小辞典』『フランス語法辞典』『日本農業年鑑』『農業白書』などが、所定の書架にもどっていません。次に使う人が大変迷惑します。原則として参考室の図書は参考室内で利用し、無断で持ち出すのはやめましょう。

(参考係 甲斐静子)

高齢化社会とコンピューター

図書館もいよいよ高齢化の波に洗われはじめました。新卒の採用は9年前に1人あつたきりというので、平均年齢のあがるのも無理ありません。つい先ごろの調査によりますと、係別でいちばん若いのは和書係で、それでも38.5歳というので、後は推して知るべし。図書館全体では……、などとは言わぬが花というものでしょう。世の中、業務のコンピューター化は大勢ですが、図書館とて例外ではありません。4月から和書整理業務がコンピューター化されます。半年ほど前から計算機センターと端末機を接続して、ILIS(アイリス)という図書館業務用のソフトを動かす実験をしてきましたが、1人で係の平均年齢を引き上げているオジさん司書は、シヨボシヨボする目でディスプレイをにらみ、ふるえる指先でキーボードをたたきながら、これがひよつとして高齢化社会の未来図書館ではないのかしらんと、図書館の行く末に思いをはせている今日このごろなのです。(整理課長 種田昭平)

お知らせ

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。平成元年というひとつの節目に新たな気持ちで大学生活を始められるみなさんへ、図書館を利用する際に必要な情報のいくつかをお知らせします。

○開館時間：8:50～18:30(土曜日16:30)。

夏休み、春休み期間中も開館しています。

○貸出冊数・期間：3冊、2週間。長期休暇中は冊数・期間とも枠が広がります。

○コピーをしたい時：2階にセルフサービスのコイン式コピー機があります。図書館では両替できませんので各自で小銭を用意してください。

○リクエスト：読みたい本が図書館になかったら、購入希望を出してください。

○上記のほか、図書の探し方、研究室図書室の利用方法等は「来ぶらりガイド」をご覧ください。

○次号「来ぶらり」第26号は7月1日発行予定です。

来ぶらり No.25 1989年4月1日発行

発行責任者：高本 進 編集委員：北村 誠 工藤晶子

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221